

---

# あるスズメの死

水色ペンキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あるスズメの死

### 【Nコード】

N0967F

### 【作者名】

水色ペンキ

### 【あらすじ】

あるはやしのなかに、ピッピというメスのスズメがすんでいました。ピッピはだんなさんをみつけ、タマゴをうんで、ヒナたちをそだてようとしていました。でも、でも。

パタ坊、ヒメ、チーチ？  
パタ坊、ヒメ、チーチ？

した草<sup>くさ</sup>にひびくこえなきこえは、子<sup>こ</sup>をよぶ母<sup>はは</sup>スズメのとまどった  
さけびでした。へんじはありません。それもそのはず、この母スズ  
メはきのうのひるに、すからおちて、いきたえていたのです。やわ  
らかかったハネはパサパサにかわき、くる目<sup>め</sup>にはもうあの、つやや  
かなひかりはありません。かるくにぎったあしのツメは、みえない  
なにかをしっかりつかんだみたいに、コチコチにかたまっています  
た。ピッピ、このスズメのなまえです、ピッピのかおにはアリンこ  
がたかって、そのアリたちとかぜとが、ピッピのハネをさわさわと  
ゆすぶっていました。

パタ坊、ヒメ、チーチ？  
パタ坊、ヒメ、チーチ？

子スズメたちはどうなったのでしょうか。それはえいえんにわか  
らないのです。もう、えいえんに。

パタ坊、ヒメ、チーチ？  
……、？

ピッピはこの春<sup>はる</sup>、つがいをつくりました。あいてはハンサムなオ  
スで、太郎<sup>たろう</sup>といました。ピッピと太郎はいつしよにすをかけるば  
しよをさがし、まちはずれの林<sup>はやし</sup>のなかの木<sup>き</sup>のひとつに、てごろなさ  
けめをみつけました。さけめはたてにながく、うえのほうがひろく  
あいていて、二<sup>に</sup>わはそのまんなかに、まずかれえだをつめ、そのあ

いだにかれくさをつめこみ、すてきなすを作りました。やがてピッピは五<sup>こ</sup>コのタマゴをうみました。

タマゴ、タマゴ、わたしたちのタマゴ、ちやいろいタマゴ、ぶちのあるタマゴ、ふとつて、すばまって、ころころしたタマゴ、はやくヒナにかえれ、

ピッピはうたいながらタマゴをあたためました。そのあいだ、太郎がピッピのためにえさをさがしてきました。太郎がつかれると、二わはしごとをこうたいしました。ピッピは太郎がタマゴをだいているあいだ、どんなうたをうたっているのかしりませんでした。もしかすると、太郎はなにもうたわなかったのかもしれない。

タマゴがしずかにふるえだしたのは、ピッピがタマゴをうんでから十一<sup>じゅういち</sup>にちめのことでした。やがて四<sup>よん</sup>コのタマゴがかえりました。ひとつはずっとタマゴのままでした。ピッピと太郎は四わのヒナに、ピヨ丸<sup>まる</sup>、ヒメ、チーチ、パタ坊と名づけました。

ヒナたちはちいさくて、あかむけで、やせっぽちのからだをしていて、への字<sup>じ</sup>にむすんだおおきなくちばしをもっていました。

おなかがへった！ おなかがへったよ！

一<sup>いち</sup>わがなきだすと、ほかのヒナもこえをあわせました。チツチ、パイパイ、たいへんなさわざです。ピッピと太郎とは、えさをさがしにとびたちました。いちにちになんども、ヒナにえさをやらねばなりません。おやどりはたいへんです。

ある日<sup>ひ</sup>、ピッピはヒナたちが、いつもよりもっとおなかをすかせているのにきづきました。ピッピはほほえんで、やさしくいいました。

おやおや、おまえたち、もうわたしたちのもつてくるえさでは足りないくらい、おおきくなってしまったの？

ヒナたちはこたえました。

おとうさんがね、おとうさんがね、けさからかえってこないの。

ピッピと太郎はめいめい虫<sup>むし</sup>をつかまえて、ヒナにあげると、すぐつぎのえさをさがしにとんでいくのです。なのでひるま、ピッピと太郎は、すではほとんどかおをあわせません。太郎がかえってこないで、ヒナたちがたべるえさが、いつものはんぶんになっていたのです。これでは、おながへるのもとうぜんです。

ゆうがたになっても、太郎はかえってきませんでした。つぎの日のあさ、ヒナたちがまたおなかをすかせてさわぎだしても、やっぱり太郎はかえってきませんでした。太郎はどこかにいってしまったのです。

ピッピはたった一わで、ぜんぶのヒナのえさをさがさなくてはならなくなりました。

そのよる、ピッピはゆめをみました。まっくらな森<sup>もり</sup>のなかを、ピッピが一わでとんでいるゆめです。すると、とおくからヒナのなきごえがきこえてきました。

どこからだろう？ ピッピはこえのするほうへとんでみました。くらやみのなかで、大きな木がぼうつと目のまえにうかんでは、うしろへときえていきました。でも、とんでもとんでも、どこからこえがきこえてくるのか、ピッピにはわかりません。ピッピはつかれて、いっぼんの木のえだにとまりました。

するとこんどは、したのほうからなきごえがきこえてきました。

ピッピはえだからとびたつと、じめんにむかってまいりました。でも、ふしぎなことに、おりてもおりても、なかなかじめんにつきません。やみはふかい穴<sup>あな</sup>ぼこのように、そこなしかったのです。まつくらなやみのおくから、ヒナのこえだけがパイパイ、チイチイとひびいてくるのでした。

ピッピがどんどんおりていくと、やがてごうごうという音<sup>おと</sup>がきこえてきました。かぜのつよい日に、谷<sup>たに</sup>まにとどろくようなぶきみな音です。ピッピがすすむと、とどろきはどんどん大きくなって、だんだんヒナのこえがきこえにくくなってきました。ごうごう、チツチ、ごうごう、パイピ……。

ピッピはそのこえがどつちからきこえてくるのか、わからなくなってしまう。そこで、もういちどちかくの木のえだにとまって、耳<sup>みみ</sup>をすましてきいてみることにしました。

ピッピがとまったえだはしめっていて、土<sup>つち</sup>をかぶったようによごれていました。そのえだは、ななめしたにむかつてのびていました。

ごうごう、チチチ、ごうごう、パイピ……。

ピッピはこえをよくきくために、えだのさきっぱのほうへあるいていきました。そっちのほうが、ひくいからです。えだはぐにやぐにやとまがって、さかんにえだわかれしています。さきっぱのほうへいくと、えだはどんどんほそくなっていきました。ピッピはちゆうでとまりました。

チチチ……。

ピッピはこえをよくきこうと、さかさになってえだにぶらさがりました。

チチチ……。

いつのまにか、かぜの音はやんでいました。  
ヒナのこえは、まっくらなやみのおくから、ちいさくちいさくきこえてきます。

どこにいるの？

ピッピは、やみのそこによびかけました。

どこにいるの？ おまえたち、どこにいるの？

へんじは、ありません。

すると、ピッピのとまっていたえだが、きゅうにおおきくしなりました。ピッピがおどろいてあたりをみると、いつのまにか、太郎がとなりにとまってました。

太郎はいいました。

ほら、あのこ、あそこにいるよ。

でも、ピッピにはみえません。

ほら、あそこにいるよ。

どこ？

ほら、あそこ。

どこ？

太郎はわらいました。

きみにはわからないんだね。じゃあ、ぼくがあの子をむかえにくから、きみはすにもどつておいで。

そういうと、太郎はとつぜんとびたつて、ましたにむかつておりていきました。きゅうにかかるくなったので、ピッピのとまっていたえだが大きくふるえました。まっくらやみに太郎のすがたがしろつぽくつかんでいて、それがどんどんちいさくなつていきました。ふしぎなことに、どんなに太郎がとおくへいっても、太郎のすがたはまるでピッピのちかくにいるみたいにはつきりしていて、ピッピには太郎がどれくらいむこうをとんでいるのか、よくわかりませんでした。ピッピは太郎を、じつとみつめていました。

そのときどこかで、カラスがカアとなきました。あさがくるというしらせです。

ピッピはきゆうに、すにかえりたくなりました。ちらりとうえのほうをみると、空はまだまっくらでしたが、なんだか、太郎としたにいるヒナのことは、わすれてしまってもいいようなきがしました。なんでそうおもったのかは、ピッピにもわかりませんでした。ピッピがうえをみて、もういちどしたをみると、もう太郎のすがたはわからなくなっていました。そして、いつのまにか、ヒナのなきごえもやんでいたのです。

かえらなくちゃ。

ピッピはえだのうえを、木のみきにむかつてのぼりはじめました。のぼりながら、いろんなことにきづきました。ピッピがあるいてい

るのはえだのうえではなくて、じつは木のねっこのうえでした。この木は、くらやみのなかにぶかぶかとういているのです。そしてねっこからしたにむかってとぶことは、太郎にはできても、ピッピにはぜったいにできないのです。そこは、土のなかだからです。ピッピはさいしょにこのねっこにおりたところまでくると、つばさをひろげてまいあがりました。

ピッピはそこで目がさめました。林のなかにあさひがさして、よなかにとおったきりのしずくが、えだや葉っぱからぴたぴたとしたたっていました。

そして、ピヨ丸がすからいなくなっていました。

ヒナがへったので、ピッピのえさとりはらくになりました。

ヒナたちはさいしょはやせっぽちでしたが、だんだん、まいにち、すこしずつ、おおきくなっていきました。

あるとき、イヌをつれたにんげんが、すのしたをとおりかかりました。イヌはヒナたちのこえをききつけて、したからさかんにほえたてました。でも、イヌは木のうえまではのぼってこれません。ピッピはすのなかではなく、ちかくの木のうえから、イヌとにんげんをみまもっていました。やがてにんげんはイヌのくびにつけたヒモをぐいぐいひっぱって、そのままどこかへいってしまいました。

またあるとき、大きなノスリがやってきました。ノスリというのは、タカの、ちいさいやつです。スズメにはおそろしい鳥ですが、さいわいピッピたちのすのうえにつごうのいい木のえだがあつて、ノスリの目からすをかくしてくれました。

でも、うんがよかったのはこの日まででした。

つぎの日、いっぴきのイタチが、ちかくの木にあらわれたのです。

イタチがいるよ、きをつけて！  
こわいイタチだ、たべられちゃうよ！

森のわかいスズメたちが、ほかのスズメたちにしらせてまわりました。ピッピはそれをきいて、すぐすにもどりました。そしてヒナたちに、しずかにするようにいいつけました。

イタチはね、こわいのよ、さわいだりしたらみつかって、みんなたべられてしまうのよ。だからおまえたち、きょうはしずかにしてなさいね。

ピッピがそういうと、ヒナたちはいつせいにうなずきました。

みんながすからみていると、イタチはなんぼんかむこうの木にのぼったり、おりたりしていました。えものをさがしているのでしょうが、うまくみつけれないようすでした。

このぶんなら、だいじょうぶ。

ピッピはそうおもって、イタチがいなくなるのをまつことにしました。ところが、しばらくたって、イタチはあまりとおくへいきませんでした。そのうちヒナたちが、おなかをすかせてなきだしました。

おなかがへった、おなかがへったよ、  
しーっ、まだ、イタチがいるのよ。

おなかがへった、おなかがへったよ、  
しーっ、だまってなさい。

おなかがへった、

ヒナたちには、イタチのきけんがわからないのです。それに、もう大きくなりはじめていたヒナたちは、おなががすくのもはやいのでした。ピッピはしかたなく、ヒナたちにしずかにするようにいつけて、エサをさがしにとびたちました。

すこししてから、ピッピはちいさなアオムシをくわえて、すのちかくまでもどつてきました。そしてちかくの木のえだにとまって、あたりをじっくりみまわしました。ピッピがすにはいるところを、イタチにみられてはまずいのです。ところが、イタチはもう、ここにもみあたりませんでした。

イタチのやつ、どこかへいったのかしら。

そのときです。ピッピのあたまのうえで、とつぜん、ちやいろいろかがうごきました。ピッピはきづくのがおくれしました。イタチはピッピよりも、さらにうへのえだにかくれていたのです。

イタチはみがるにえだからとぶと、ピッピのせなかにおそいかかりました。

しまった！

ピッピはとつさに、とんでにげようと思いました。ところが、ピッピがつばさをひろげたしゅんかん、そのつばさに、イタチがかみついたのです。

あつ、

するどいキバが、ピッピのつばさにくいこみました。ピッピはイタチからにげようとして、そのままはげしくはばたきました。ところがつばさをくわえられているので、ピッピはイタチの目のまえで、

はげしくからだをゆすることしかできません。ピッピの口からアオムシがこぼれて、じめんにむかっておちていきました。ピッピがあらばれると、バタバタとものすごい音がしました。その音は、きつとすのなかのヒナたちにもきこえたはずです。

はなして！ はなして！

ピッピはなおも、はばたきました。あまりにもはげしくはばたいたので、つばさのなかにあるホネが、ポキリとおれてしまいました。ホネがおれてしまったので、つばさはきゆうに、へんなふうにまがりました。つぎのしゅんかん、ピッピのつばさから長いハネがごっそりとぬけおちて、イタチの口からピッピのからだはなれました。

でも、ピッピはもう、とぶことができなくなっていました。

ピッピのからだはイチヨウの実<sup>み</sup>みたいにくるくるとまわって、木のうえから、まっすぐじめんにおちました。ぼとりという音が、林のなかにこだましました。ピッピはもうろうとして目をまわし、おち葉のうえで二、三<sup>さん</sup>どほど、ころげました。イタチはそれをみて、木のうえからするするとしじめんにおりてきました。そしてイタチがピッピにむかってあるきだした、そのときです。

ワン、ワンワン、

けたたましいほえごえがして、いっぴきのイヌが、イタチにむかってかけてきました。いつだったか、ピッピのすのしたをとおりかかったイヌでした。イヌはくびわから、さきつぽをわっかにしたヒモをひきずっていました。

ワンワン、

イヌにほえたてられてびっくりしたイタチは、ほそながいからだをいっぱいのにのばして、林のおくににげていきました。

「太郎、まで、そこでとまれ！」

いきをきらしたおじいさんが、イヌのあとをおいかけてきました。おどろいたことに、このイヌも、なまえを太郎というのでした。イヌの太郎はピッピをみつけると、ぬれたはなさきでくんくんとおいをかぎました。でも、ピッピはもう、にげることもできません。

「とつぜんヒモをぐいぐいひっぱるなんて、こまったやつだなあ」

おじいさんは太郎においつくと、ぶつぶついいながら、ヒモのさをひろいあげました。そして、おちばのなかにおちているピッピにきがつきました。

「さっきのイタチ、スズメをとろうとしていたのか」

イヌの太郎はおおてがらによるこんで、しっぱをぶんぶんふりまわしています。

「だめだよ。イタチがとうとうとしていたものを、よこどりしちゃいけない」

太郎はふまんそうでしたが、おじいさんはヒモをひっぱると、太郎をつれてどこかへいつてしまいました。

ピッピはこわいイヌも、イタチもいなくなったので、ひとまずあんしんしました。

でも、ピッピはもう、木のうえへは、すのうえまでは、もどれな

いからだになつていたのです。

どうしよう、すにもどらなきや。

どうしよう、エサがないと、ヒナたちがしんでしまうわ。

木のずつとうえのほうから、ヒナたちのさえずりがきこえてきました。ピッピはなんとか木のしたまではっていましたが、うえにあがることはできません。

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パイパイ、チツチ、パイパイ、チツチ、

ピッピのよびかけも、ヒナたちもとどいているのかわかりません。

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パタ坊、ヒメ、チーチ？

どうしよう。

どうしよう。

どうしようも、なかったのです。

ここでおはなしは、さいしょのところへもどります。

ピッピはそのまま木のしたでよわって、よなかの、くつきがひえこんだときに、しんでしまったのです。

イタチは、ピッピのしがいをとりには、もどってきませんでした。ヒナたちがどうなったのかは、だれにもわかりません。

ただ、この林のなかには、ヒナたちをよぶピツピのこえが、かぜにまぎれて、しばらくのあいだ、こだましていたのです。

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パタ坊、ヒメ、チーチ？

……、？

でも、そのこえは、だれにもきこえませんでした。

<おわり>

(後書き)

これは、あとがきです。

あなたは、ピッピをたすけようとしなかったおじいさんを、ひどいひとだとも思いますか。

しんでしまったピッピを、かわいそうだとも思いますか。  
ピッピと太郎のヒナたちを、かわいそうだとも思いますか。

おなかをすかせたイタチを、かわいそうだとも思いますか。ひどいやつだとも思いますか。

ピッピがじめんにおっことしたアオムシを、かわいそうだとも思いますか。なんともおもいませんか。

こたえは、ありませんです。ないけど、さがしてみよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0967f/>

---

あるスズメの死

2010年10月9日01時19分発行